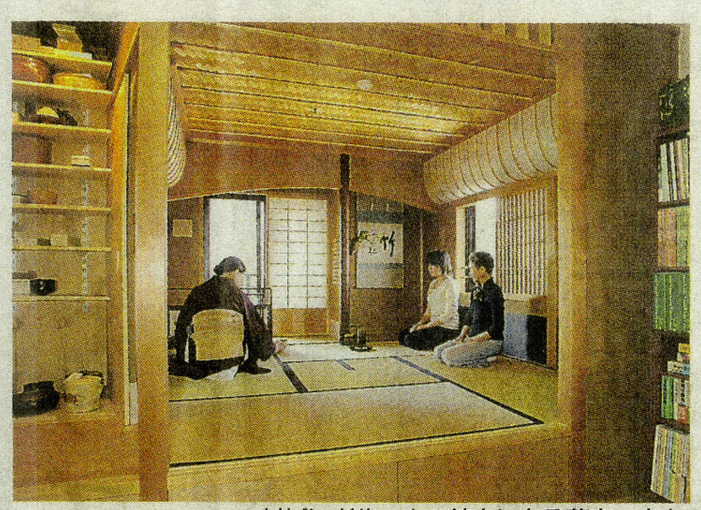
生活に合わせ空間演出

マンションで和の暮らし

和の暮らしを見直そうとする人が増えている。マンションをリフォームして和の空間を作ろうとするケースもあれば、まずは、家具から「和」を取り入れてみようとする人もいる。リフォームのコツや「洋」から「和」への模様替えの工夫点などをたずねてみた。（文化報道部　行司千絵）



リビングルームの続きにある茶室。床を上げ、天井に網代を張ったことで、茶室独特の静かな空間ができた（京都市内）

茶室にリフォーム

炉を切り、押し入れは水屋に

京都市内の自宅マンションで茶道を指導する八坂宗佳さんは、リビングルームの続きにあった、押し入れ付き和室を茶室にリフォームした。六年前に大分県から転居。「お茶とともにある暮らしを京都でも続けたかった」と話す。

茶道の「きまり」を守るために、さまざまな課題をクリアしなければいけなかった。六畳の空間に炉を切り、水屋を納めなくてはならない。軸をかける床の間や茶道具を収納する場所も必要だ。鉄筋コンクリートの四角い空間に、床柱などの柱を新たに建て、本格的に土壁を塗り、天井には杉で編んだ網代を張った。

茶室を「非日常の空間」にするため、そこだけ床を上げて、リビングとの違いを際だたせた。四畳半の下にできた空間は茶道具の収納場所に。押し入れ部分を利用して、簡単な水屋を配した。

マンションの室内は機密性が高い。炭に火を入れることを考慮し、一酸化炭素中毒の危険をのぞくために、エアコン用の排気口を利用して換気扇を取り付けたり、空気が流れるように、すき間の多くあいたデザインの欄間を入れた。

現場監督を務めた畑中正之さん(七二)は「鴨居などの化粧材は約四㍍と長く、エレベーターでは無理。非常階段を使って運び上げ、リビングの窓から室内に入れた」と振り返る。

施工を担当した千本銘木商会（中京区）の中川典子さん(三六)によると、マンションによっては規約でリフォームができなかったり、リフォームできても、壁に穴を開けたり窓を増やすなど、建物自体をいじることは不可能なことが多い。作業中は工事音が響くので、近隣住民の理解も必要だ。「どこまで可能なのか、調べた上でリフォームの計画を作る必要がある」と話す。

冬場になると炉に炭を入れることができる（京都市内）

家具や格子

ひと工夫で変わる印象

ふすまや格子、家具などで「和」を取り入れることも可能だ。

天板のしま模様と配色が北欧の家具を連想させる木製のダイニングテーブル。洋風の部屋にとてもしっくりととけ込んでいた。「実は床の間に使う木の廃材で作りました」と、一級建築士事務所「アラキ工務店」に勤める小野敏明さん(三三)＝左京区＝は明かす。廃材で家具を作るオランダのプロジェクトにヒントを得て、京都の木材業者に作ってもらった。材料は京都産のケヤキ、サクラ、ナラなど。できあがった机は日本の寄せ木細工のような味わいがある。

京町家の再生にもかかわっている小野さんは「従来の和の定義にしばられず、素材を生かすという和の精神や優れた和の技術を取り入れながら、今の生活にあった方法を楽しんでみては」と話す。

建築家の田岡佳江子さん(三九)＝北区＝は「格子や障子を取り入れて、和の雰囲気を」と提案する。以前手がけたマンションのリフォームで、別々だった寝室と居間を一つにした。来客の際に空間を仕切れるよう、部屋の中央部分に焦げ茶色の格子を取り付け、白壁に収納できるようにした。「格子や障子は、向こうの気配を感じることができる。考えてみれば、あいまいに仕切るというのは、和の空間の特徴」

視線の高さによっても「和」は演出できる。「テレビ台に置いていたテレビを床にじかに置いたり、いすをやめて床に座るスタイルにするだけで、部屋の印象は変わりますよ」という。

銘木の廃材で作ったダイニングテーブル。「家族が集う場所だから素材や技術にこだわった」と話す小野さん（京都市左京区）

まるごと応援 くらし塾

家から「床の間」が消えつつあると聞きますが、新築マンションなどの間取りを見ていると、和室すらないことがあります。あってもリビングルームの一角の「畳スペース」。でも、狭いわが家で和室は便利な空間です。ふとんを敷けば寝室に、長机と座布団を持ってくると客間に、テレビをつければ家族が集まるリビングに。遊び場にもなるため、何度張り替えても、すぐに障子を破られてしまいます。破れ障子が少々みすぼらしいのですが。

取材で表具屋さんの仕事場を訪ねたことがあります。いろんな種類の紙と布がありました。何と何を取り合わせれば書や絵画が引き立つのか。素材と内容とはつりあっているのか。美濃に吉野、黒谷…。どの産地の紙がどんな用途に適しているのか。適材適所。昔からの「きまりごと」がきちんと頭に入っているからできる仕事なのでしょう。障子紙の最上は美濃紙。障子を張るのも表具師の仕事の一つなのだそうです。「障子の向こうの気配を、肌や耳で感じとりながら、日本人は繊細な感覚を養ってきたのではないですか」と問いかけられました。

予定帳

23日付はセカンドオピニオン、30日付は、子育てパパデビューを特集します。出産後すぐ、子育てに一番手のかかる時、新米パパに何を望みますか。皆さんのご意見をお待ちしています。